

# 学力低下に関する研究

## —国語の学力上昇に注目して—

佛教大学大学院 山 崎 瞳

### 抄 録

2002年12月に発表された小・中学校教育課程実施状況調査によると、他の教科に比べ、国語が各学年とも前回調査と比べて上昇していることがわかった。国語の領域は表現（音声言語）、表現（文字言語）、理解（文学的な文章）、理解（説明的な文章）、言語事項の5領域を設定している。このなかでも、中学校において音声言語と言語事項の項目は全学年とも上昇していた。本研究では、学習塾でのエスノグラフィーをおこない、現代の子どもたちは、なぜ国語力が上がっているのか、その学習活動を分析し、要因

を明らかにしたものである。

結果として、子どもたちの多くは国語に対する考え方や意識が変化しており、それは公的空間をもたない子どもたちが他の教科のように国語を学習することによって学力が向上したことが明らかとなった。

### キーワード：

学力低下、国語、塾、「構築主義」、「家のなか主義」

## I. 研究の目的

新学習指導要領の削減とそれによる学力低下の懸念の声から、文部科学省（以下、文科省と略）は、全国学力調査をせざるを得ない状況に追い込まれた。その一例が、2002年12月に発表された小・中学校教育課程実施状況調査（国立教育政策研究所教育課程研究センター）である。それによると、国語と理科3年のみが、前回調査と今回調査で設定された設定正答率を上回り、その他の教科は大きく低下していることが明らかとなった。このような流れのもと、中央教育審議会（以下、中教審と略）は、2003年10月に学力向上の姿勢をより明確にしたものを答申している。「学力は低下していた」という共通認識のもとで、近年の教育改革は進められ

るであろう。文科省の公式見解においても、学力低下は認められたのである。

しかし、この学力調査では、国語の学力は低下せず、どの学年においても設定正答率や前回の結果を上回るものであった。また、東大グループがおこなった学力調査においても、国語は生徒間の格差が数学よりも少なかったことがあげられる<sup>(注1)</sup>。学力低下の波を、国語だけは受けなかったことになる。なぜ、国語だけはその学力が落ちなかったのであろうか。

その要因を学校教育に求めることは難しい。なぜなら、学習指導要領の内容は年々削減され、教科書は年々内容を精選せざるを得ない状態だったからである。他の教科は同様の状態で学力が低下しているため、国語の学力だけが低

下しなかった理由にはならないのである。つぎに、最近多くの学校で始められている読書活動の影響があげられるが、これも理由にはならない。なぜなら、調査時期である2002年1月時点では、読書活動が全国的な規模で推奨されてはいなかったからである。それを裏付けるように、全国学校図書館協議会と毎日新聞社が共同しておこなう学校読書調査によると、子どもたちの過去10年間の読書冊数は2001年まであまり伸びておらず、不読者層の増加率が大きいからである(図1参照)。

このような、国語の学力向上の背景には、子どもたちの国語に対する考え方が変わってきたのではないかと考えた。国語は言語活動や学習活動を支える最も基本の科目である。そのため、小学校の学習指導要領においても、国語の時間は全教科でも一番多くの時間を使って学習しており、文部科学省の政策のなかにも、国語教育の重要性は述べられている<sup>(注2)</sup>。しかしその反面、日常に使う言葉に関する問題が多いた

め、「国語は勉強してもしなくても点が変わらない」といった生徒が多かったのではないだろうか。学校の学習でのみ使用する虚学の要素が強い英語や数学と違い、国語は普段使う言葉や本を読むときの基本技能であり、実学の要素が強い。したがって、学校で勉強するよりも本や新聞を読んだり手紙を書いたりすることで国語の力をつけやすいと考えられがちであり、学校での学習に積極的ではなくなる。

しかし、このような旧来の考え方を現代の子どもたちはしていないのではないだろうか。国語のような実学の要素が強い教科であっても、子どもたちは積極的に学習する態度をもつようになっているのではないだろうか。

本研究では、「他の教科に比べて国語の学力が上昇した理由は、子どもたちの国語に対する認識が変化してきたからではないか」を仮説に設定し、学習塾A塾でのエスノグラフィーをおこなった。学習塾を調査対象とした理由は、保護者や生徒の自主性によって学習を進めること

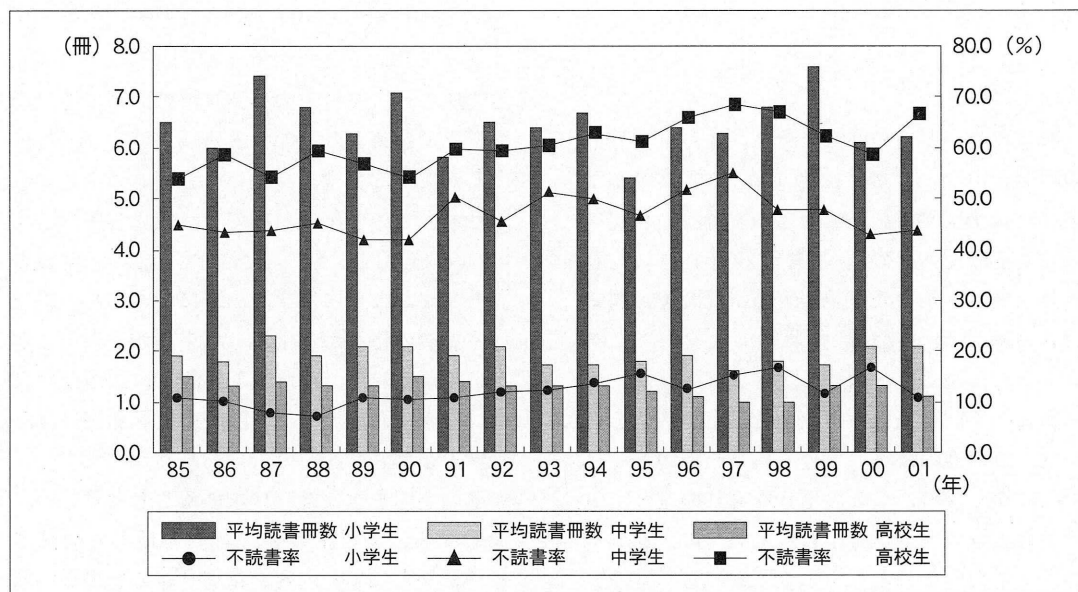


図1 読書冊数および不読率の推移

(資料) 全国学校図書館協議会 (<http://www.j-sla.or.jp/oshirase/kekka.html>) より作成

ができるという点で、今回の調査対象にふさわしいと考えたからである。主に中学生の国語の授業およびその言語活動に注目し、子どもたちの国語力が何故上昇したのかを分析し、その要因を明らかにすることが本研究の目的である。

## II. エスノグラフィーの概要と分析結果

### 1. 参与観察の概要

それでは、学習塾に通っている生徒は、国語に対してどのような意識をもっているのだろうか。ここでは、奈良県下にあるA塾を取り上げ、そこに通う生徒54名を観察対象とし、分析していく。観察対象の属性は次のとおりである(表1参照)。

表1 サンプルの属性

	学年	人数	定期試験平均 (国語のみ)
国語学力上位	中学1～3年	22	82.3
国語学力下位	中学1～3年	32	40.5

【調査期間】2003年7～10月

【調査対象】A塾での個別指導クラスの中学生  
計54名

【調査方法】参与観察

最初に、調査をおこなったB市の概観についてふれておきたい。B市は人口11万人。B市は古く聖徳太子の時代からその存在が認められる中核都市であった。農村地域が大多数であったが、大阪と結ぶトンネルが開通してからは、大阪などのベッドタウンとして宅地化が進み、マンションや戸建て住宅が立ち並んでいる。また、大阪府下の新興住宅地と駅を結ぶバスを使って塾へやってくる生徒も多い。A塾に在籍する生徒の半数近くは大阪府下の学校の生徒である。

A塾<sup>(注3)</sup>は駅から徒歩10分ほどのところであり交通の便はあまりよくない。しかし、大阪か

ら奈良へ走っているバス停の近くにあり、府下の小中学生はそこを走るバスを使って塾へやってくる。A塾は個人が経営する小規模校であり、教室は奈良県内に4校存在する。A塾の教員数としては専任講師が1名、アルバイトの非常勤講師が12名勤務しており、生徒数は中学生が54名、小学生が5名、高校生が22名在籍している(2003年10月現在)。

### 2. 参与観察による分析結果

それでは、本研究の仮説である「他の教科に比べて国語の学力が上昇した理由は、子どもたちの国語に対する認識が変化してきたからではないか」はA塾に在籍している国語の得意な生徒と国語が苦手な生徒の行動・言動から分析していく。

まず、彼らの国語の授業風景について述べていく。学校での補習的な役割の強いA塾は学校の教科書に準拠したテキストを用い、授業進度も学校のそれとあまり変わらない。したがって、生徒たちは学校でわからなかったことをA塾に聞きにくるといった様子であった。基本的に、生徒の受講する科目は英語や数学といった主要科目が多く、講師もそれらを主に教える人間がほとんどである。しかし、専任講師の話によると、この数年の間に国語を受講する生徒が増えており、国語を専門とする講師が不足している、と述べていた。

授業ごとに出される宿題も、同時期に学校で学習している範囲の復習といったものが多い。しかし、国語の苦手なSは授業に対して積極性に乏しく、宿題やテキストを忘れるといった光景が多く見られた。

講師：それじゃ、宿題だして。

Y：先生、めちゃくちゃ多かったから、しんどかったわ。(宿題を提出する)

S：先生、今日国語の用意もってくるの忘れ

た<sup>①</sup>。

講師：何しに今日ここに来たんや。宿題も忘れたんか。

S：先生、あんな、ちょっと聞いてや、今週いっぱい用事があったからできひんかってん。

講師：でも、Yさんはちゃんとやってきてるやろ。

S：そうやけど、できひんかってんて。

講師：そしたら、Sさんは今日残って宿題やって帰るように。

S：先生、今日は早く帰らなあかんからかえらせてほしい<sup>②</sup>。

下線部①のように、国語の授業を受けるにも関わらず、国語の苦手な生徒であるSは宿題を忘れる場面がよくみられた。A塾で宿題を忘れた生徒は、上記のように授業が終わった後も居残りで生徒にさせるため、宿題をしないことは生徒にとっても負担になるにもかかわらず、Sは下線部②のような理由で宿題をしないままであることもたびたび見られた。また、授業中の質問にしても、国語の得意な生徒と苦手な生徒ではその内容が異なる。

講師：今までやってたところでわからんところはあるかな。

N：先生、この話で一番大事ななんはどこになるん。

K：先生、この漢字の読み方わからへん。教えて。

国語の得意なNの質問の内容はその時間に学習した題材の重要箇所に関するものだが、国語の苦手なKの質問は、講師の話をおまわり聞いていないためか、題材の初歩的なものが多くを占めていた。学習の内容に対して、両者の関心の程度は大きく違うことが読み取れる。

それでは、この生徒たちはなぜ、日常生活でも使うことの多い国語の授業を塾で受けるようになったのだろうか。

筆者：なぜ、国語の授業を塾で受けるようになったのですか。

A：小学校のときは、そんなに難しくなかったけど、中学入ってから授業が難しくなって先生の言っていることが分からんようになったから。別に誰か誘われてきたわけじゃなかったなあ<sup>③</sup>。

S：中学に入ってから学校の成績が落ちて、お母さんに「塾に行きなさい」って言われたから<sup>④</sup>。とりあえず、そのとき成績の良くなかった教科を取ることになったから、国語を取った。

国語の得意なAは、「中学に入学してからの国語がわからなくなったから」塾にやってきている。また、下線部③のように、他の人に強制的に塾にやってきたのではなく、自分の自主性にもとづいて教科も選択していた。それに対して、国語の苦手なSは下線部④のように両親からの強制によって塾にやってきており、教科選択もその当時に成績の良くなかったものを選択している。したがって、授業中の生徒の積極性の差はこのような動機の違いに起因していると思われる。なぜなら、「塾に行かないと勉強がわからない」と自覚している生徒と他人から強制的に塾に通わされている生徒とでは、学習に対する積極性に差が出てくるからである。

筆者：国語は難しいですか？

Y：難しい。あんな言葉使わへんもん。使わんから分からへんし、教科書読んでも文章の意味が分からんことが多い<sup>⑤</sup>。それを書いた人の言いたいこととかわからへんから、塾で教えてもらう。

S : 難しい。でも、勉強せんでもできると思  
う⑥。日本語やから意味はわかるし。

筆者：他の教科に比べて、国語をどのくらい勉強していますか。

Y : とりあえず、テスト前は英語とかと同じくらい勉強する。だってやらなかったら分からへんし、本とか読まへんから余計に勉強せんと。

S : あんまり勉強せえへん。やっぱり英語とか数学のほうを勉強する。国語って勉強しても点とかめっちゃ上がる訳やないし、それやったら他の教科の勉強するわ⑦。

このように、国語の得意なYと国語の苦手なSでは、国語に対する考え方が全く違う。国語の得意なYは下線部⑤のように自分の国語力に対して疑問を抱いており、勉強する必要性を日ごろから感じていることがうかがえる。それに対して、国語の苦手なSは、国語ができないにもかかわらず、下線部⑥のように国語を勉強する必要性をあまり感じていない。むしろ、下線部⑦のように国語は勉強しても仕方がない、といった一種の諦めにも似た感情を抱いていた。

これらの分析から、次の2つのことが明らかとなった。1つめに、実用的な科目のために国語を勉強しなくてもできる、といったこれまでの一般的な考えを、国語のできる子どもはもっていないということである。なぜなら、Yの述べるように、教科書に使われるような言語表現は「自分が使う言葉とは違う」という言葉が示すように、教科書で勉強する国語と子どもたちが日常で使う言葉に乖離が見られるからである。したがって、彼らの多くは国語に対して「勉強しないとわからない」といった考えをもち、他の教科を勉強するように塾へやってくるのである。

筆者：国語ができる生徒とできない生徒の一番の違いは何ですか。

講師：そうですね、国語のできる生徒は、自分が「国語ができない」ことをよくわかっていていると思います。テスト前に「国語の補習してほしい」って言うてるのはそんな子どもたちが多いですね。国語のできない生徒は、自分が「何がわからないのか」がわかっていないように感じます。テスト前に「勉強しなさい」って言うても、「別に勉強せんでも国語はできるし」って言う反論は、国語のできない生徒に多い⑧です。だから、補習を組んでもやってこないし。あと、文章題をまったく読まずに問題へ進んでしまうのも、彼らの特徴ですね。斜め読んでしまいますね、できない生徒は。

2つめに、その一方で国語が苦手であるSが、旧来の「国語は勉強しなくてもできる」といった態度で塾の授業に臨んでいることである。下線部⑧のように、国語を指導する講師からは、国語の苦手な生徒ほど「勉強しなくても国語はできる」といった発言が多い、と述べていた。これは、国語が苦手な生徒が日常で使用する言葉と教科書で勉強する国語で使う言葉に違いがあることがわからないために、「日本語は毎日使っているのだからわからないわけがない」といった認識をもっていると考えられる。

また、国語の得意な生徒と苦手な生徒の相違点として、友人関係の違いがあげられる。A塾は個別指導の形態をとっているため、進学塾にありがちな能力別学級編成をおこなっておらず、2～4名の生徒で授業をおこなうのが普通であった。授業が終わった後に、国語の苦手な生徒はある一定の友達とのみ行動を共にするのに対し、国語の得意な生徒の多くは自分の中学校以外の生徒とも交友を深める場面がよく見ら

れた。このことは、両者の国語力に大きな影響を及ぼしていると考えられる。なぜなら、前者は自分の所属するグループでしか言語による意思伝達をおこなえていないのに対して、後者はさまざまなグループとコミュニケーション活動をおこなっていると考えられるからだ。ある一定のグループとしか友人関係を築いていない生徒は、その他のグループに属する友人との言語活動をする場面が限られてくるため、他者の話し方や考え方に触れる機会がその分少なくなり、日常の言語コードが限定的になる。逆に、多くの友人をもつ生徒は、国語の苦手な生徒よりも多く他者とのコミュニケーションを取ることになり、言語活動の機会が増え、言語コードは概括的になる。このようなことは、Eメールや携帯電話といった情報機器の利用の場面でもよく見られる。生徒の多くは携帯電話を所有しているが、それをもっていない生徒は国語の学力が低く、携帯電話の必要性をあまり感じていなかった。

以上のことから、国語力の向上に寄与する原因として国語に対する認識の変化があげられる。子どもたちの多くは国語を英語や数学と同

じように「勉強しないと点数の取れない教科」と認識していることがわかった。これは、学力が低下した論理とは全く違う論理が国語という教科には存在していたからだと考えられる。すなわち、海外の研究者に賞賛され、OECDなどの国際機関にその高い学力を認められた日本の子どもたちや学校教育という側面と、80年代後半から現れた「新人類」に代表される国語のできない若者という側面である（図2参照）。

学力低下論争が起こる以前、高い学力をもつ日本の子どもたちは、過度の受験ストレスにさらされ、さまざまな問題を引き起こしている、という言説は長い間多くの人に信じられており、文科省はその認識の下に学校教育での「ゆとり路線」を貫いてきた。しかし、その一方で、敬語を使えない若者、慣用句を知らない若者といった言説は、80年代後半から中野収（1986）らなどの研究者やマスコミから指摘され始め、こちらも多くの人に信じられてきた。これが人々の意識のなかに「子どもたちの意欲や関心に応じた学習をさせよう」といった児童中心主義が根づいていく一方で、「子どもたちに国語を勉強させなくてはならない」「国語は勉強しな

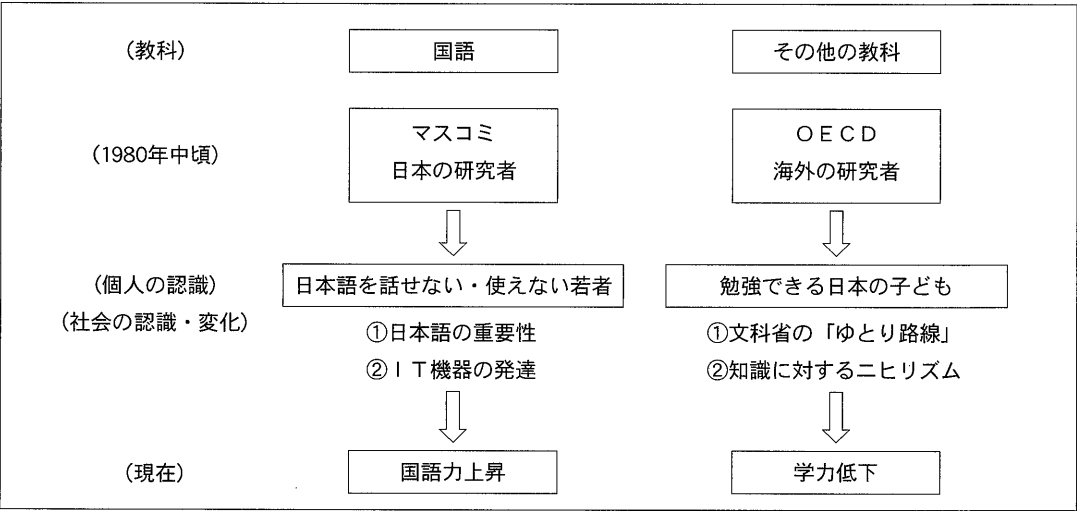


図2 学力低下の流れと国語力上昇の流れの概念図

いといけない」といった認識を生んだのではないだろうか。

中河伸俊（2000）によると、社会構築主義とは「実在物とみなされているある現象は、じつは、人々による文化に媒介された共同の活動 joint activities の産物（構築物）である」と述べている<sup>(注4)</sup>。「日本は学歴社会である」「日本の子どもたちは高い学力をもっているが、毎日塾に通っていて精神的・肉体的につらい日々を送っている」といった現象は、研究者やマスコミが発表する多くの情報から、それは実在していると認識するようになった。それを事実と受け止めた上で、文科省は学歴社会を是正するための「ゆとり路線」を打ち出し、多くの市民が学歴社会に対する懐疑心と知識に対するニヒリズムを深めるようになった。この結果、子どもたちの学力が階層差をとまって低下したのは、荻谷剛彦（2001）の研究によって明らかにされている。それと同時期に「日本の若者は正しい日本語が使えない」といった現象を正高信男（2003）は、若者の「家のなか主義」<sup>(注5)</sup>と述べている。若者は公的空間と私的空間を区別することができないために、電車の中や道端で座り込んだり化粧をしたりするような様子を示している。それは、敬語や慣用句を使えず、話し言葉で文章を書いてしまう中学生にも同様のことが言えるであろう。学校のなかを公的な空間とわからない、もしくは思わない生徒が国語を「難しい」と考えるのではないだろうか。そのため、子どもたちは公的な言語である国語を学習するようになったのである。また、90年代後半からの情報機器の爆発的な普及は言葉の使用頻度を増加させることになり、実際は子どもたちの国語力は上昇しているという学力調査の結果が出たと考えられるのである。したがって、仮説の「他の教科に比べて国語の学力が上昇した理由は、子どもたちの国語に対する認識が変化してきたからではないか」は、実証され

たといえる。なぜなら、「子どもたちは勉強しすぎている」といった子どもたちの学力に関する認識と、「若者は日本語が使えない」といった国語に対する認識は、問題認識がまったく異なっており、その差異が結果として国語力の上昇とその他の教科の学力低下といった事実になったと考えられるからである。

### Ⅲ. まとめ

以上考察してきたことを簡単にまとめて結びにかえたい。

本来、国語という教科は私たちの言語活動を支える根幹の教科にもかかわらず、子どもたち自身は「勉強しても仕方がない教科」「勉強しなくても何とかなる教科」として国語をとらえている傾向があった。しかし、現代の子どもたちはそのように考えておらず、国語を「勉強しないといけない教科」といった考えをもっていることが明らかとなった。その背景としては、「日本の子どもたちの学力は高いが、日本は学歴社会である」といった学力に対する問題認識と、「日本の若者は正しい日本語を使えない」といった言語活動に対する問題認識の違いが存在しており、それに対する社会や市民の認識の変化が学力テストの結果を生み出したと考えられるのである。

小・中学校教育課程実施状況調査において、子どもたちの国語の上昇は認められたが、依然として、国語もその他の教科と同様に学力低下のひとつとして取り上げられる傾向は多い。文科省は国語力の向上を目的に、2002年より、子どもの読書活動推進の政策を打ち出している。これは、本を読まない子どもたちに対して毎日10分程度の読書の時間を設けるといったものである。その成果として、前述した2003年における読書調査では、子どもたちの読書冊数は上昇し、不読者層は減少していた。また、島村直

己ら（2003）も、高校生の国語力は低いといった調査報告を出している。どのような教科も学力としてとらえ、施策を進める方針は極めて危険であるといわざるを得ない。なぜなら、今回の教育課程実施状況調査の後に、国語とその他の教科でなぜこれほど結果が異なったのかという分析をしないまま、経験や現象によって教育政策を進めれば、「学歴社会」という元凶に対して、「学びから逃走する子どもたち」<sup>(注6)</sup>という現状を調査しないまま、ゆとり教育を推進した以前の教育改革のように、学力低下のような副産物を発生させかねない。国語力上昇と学力低下の背景は異なっていることを自覚するかどうかで、政策の立て方もおのずと変わってくるだろう。

調査からもわかるように、子どもたちの国語を学習する様子は他の教科と変わらなくなってきている。数学の公式をとくように問題を解き、暗記科目のように内容を憶えていく。前述した小・中学校教育課程実施状況調査でも、教師の側は小説が子どもたちにとって理解されやすいと考えているのに対して、子どもたちはあまりそのように考えていないという結果が出ている。それは、子どもたちの国語という教科に対する考え方がわれわれと異なっているといった事実を表す典型であろう。登場人物や話し手の意図や状況を把握できない子どもは塾の授業で多くみられた。

このような教科に限らず、学習に対して動機づけをもたない生徒に対しての教育的配慮を学校や国はどのようにしていくのだろうか。現在は、そのような子どもたちを対象にした塾などの教育産業が再び隆盛しているが、本来は学校が担うべきものであったはずである。学力問題から見えてくることは、われわれに学校の存在意義を再考させる問題提起なのではないだろうか。

## 【注】

- (注1) 荻谷剛彦他『調査報告「学力低下」の実態』岩波ブックレット、2002、pp.13～18
- (注2) 文部科学省は、平成15年度から「確かな学力」向上のため、「学力向上アクションプラン」を実施する。その一つに国語力向上推進事業があり、国語力向上モデル事業、国語指導力向上講座などが実施されている。
- (注3) A塾は少人数授業を主とする個別指導塾である。したがって、進学塾に見られるような能力別学級編成をしていない。A塾では、受講する科目を選択することが可能である。受講科目としては英語・数学・国語・理科・社会の5科目設置されている。多くの子どもたちは英数の2教科、またはそれに国語を加えた3教科を受講するのが主流である。また、英語・数学のみの受講生も多い。学習進度としては、学校とほぼ同じカリキュラムを組んでいる。A塾では、学校の定期テストにあわせて正規授業とは別にその対策授業を補習という形でおこなっており、希望者のみがこれを受けることになる。
- (注4) 平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学 ― 論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社、2000
- (注5) 正高信男『ケータイを持ったサル ― 「人間らしさ」の崩壊―』中公新書、2003、p.14
- (注6) 佐藤学『学びから逃走する子どもたち』岩波ブックレット、2001

## 【参考文献】

- 荻谷剛彦他『調査報告「学力低下」の実態』岩波ブックレット、2002
- 中央公論編集部・中井浩一編『論争・学力崩壊』中公新書ラクレ、2001
- 中井浩一編『論争・学力崩壊2003』中公新書ラクレ、2003
- 荻谷剛彦『なぜ教育論争は不毛なのか』中公新書ラクレ、2003
- 中野収『若者文化人類学』東京書籍、1991
- 中野収『新人類語 ― 異人種を迎えるビジネスマンのために―』ごま書房、1986



- 平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学 ― 論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社、2000
- 島村直己他『高校生の国語力 ― 高校国語テストの結果報告―』第55回日本教育社会学会口頭発表資料（於：明治学院大学）、2003
- 正高信男『ケータイを持ったサル ― 「人間らしさ」の崩壊―』中公新書、2003
- 佐藤学『学びから逃走する子どもたち』岩波ブックレット、2001

